奇病連盟

(151)

北杜夫

小団円　五

平は借着のモーニングも着てまとず、普通の背広姿であった。

男が、困惑したように鼻の穴をほじくっていた。

「まあユーモラスに彼のだらしの

朝日新聞社

奇病連盟　　定価 350円

発　行　昭和42年6月15日第1刷

著　者　北杜夫（きたもりお）

発行者　朝日新聞社　足田輝一

発行所　東京 名古屋 大阪 北九州　朝日新聞社

印刷　凸版印刷　製本　青柳・清美堂製本
© 北杜夫 1967

目

次

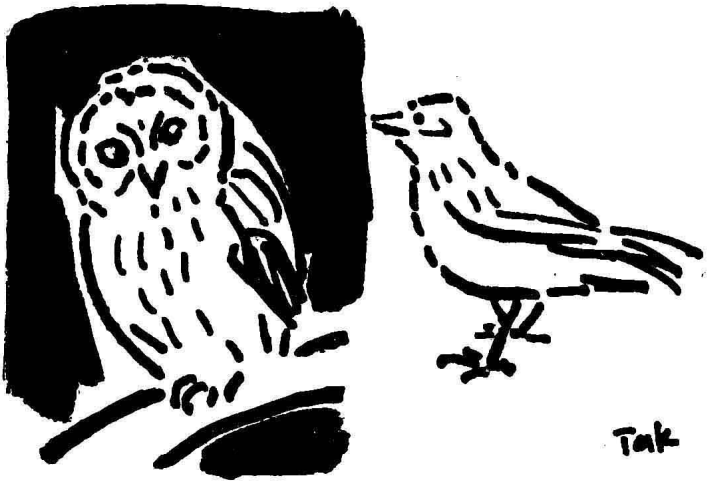
うらぶれた出勤 7
スカウト氏登場 23
最初の集会 46
会　食 64
会長の邸宅 78
女づく 94
新しい体験 118
金づく 134

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俄か紳士　154
女管理人　170
事件は進む　185
泥棒と古都　201
小団円　221

さしえ　中村琢二

奇病連盟



うらぶれた出勤

目覚まし時計が、枕元の右側で鳴りはじめた。

わりに小型の目覚まし時計で、その音も、それほどかしましくなく、やさしい。

眠っている男、山高武平は、かすかにぴくりと動いた。しかし、それ以上の反応は示さない。

小型の目覚まし時計は、およそ一分ほど鳴りつづけ、その音はとまってしまった。それでも、山高武平の深い眠りをごくかすかに妨げ、三割方、覚醒へと向かわしたのは確かである。

五分後、今度は枕の左側で、中型の目覚まし時計が鳴りはじめた。かなり大きな音だ。

山高武平は、モーローと片手をのばし、時計を突きとばした。と、たちまち甲高い音響は、ぴたりとやんだ。その時計は、主人公の意志、あるいは細工によって、そのような習性を有するのである。

山高武平はまだ眠りつづける。

すると間もなく、今度は枕のすぐうしろに置いてある、物凄くでっかい目覚まし時計が鳴りはじめた。その音響は、ドラムカンを叩くがごとく、死者をも目覚まさずにはおかぬという激しいものであった。

山高武平は、目をつむったまま、顔をくしゃくしゃにゆがめて、半身を起した。死物狂いに、手さぐりで、時計の物凄い音響をとめようとする。

しかし、その時計は、これまた主人公の細工によって、絶対に音がとめられぬようにできている。

ついに山高武平は目を覚ました。床の上にすわり、目をごしごしと十何遍かこすり、

「あー」

というような、世にも情けない声を発した。

朝なのだ。起きて、勤めに行かねばならぬ朝なのだ。

――わりに最近、英国の心理学者が、こんな研究を発表した。

「あなたはフクロウか、ヒバリか」

この両者は、朝の目覚めによって決まる。寝起きがわるく、アクビや、ため息ばかりをし、口をきく気にもなれないのがフクロウ型。

逆に、起きるなりほがらかで、顔を洗うときにも歌を口ずさむのがヒバリ型。

この両者は、どちらも心理学的にはノーマルで、朝起きてから時間が経つにつれ、この違いも次第になくなるという。

ただ、心理学者は、こうも述べている。

「フクロウとヒバリは気分的に引きあうらしく、フクロウは多くヒバリと結婚するというデータがある」

この説がどの程度正しいかは、まだ明らかにされていない。この心理学者は怠け者なので、その後ちっとも研究を発表しないからである。

ところで、三つの目覚まし時計を用い、やっと起きあがるような山高武平は、典型的なフクロウ族ではない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

か。三段式ロケットならぬ、三段式目覚まし時計である。

「武平、起きましたか」

隣室から声がかかった。

それは山高武平の、当年六十二歳になる母親の声であった。

「武平、起きましたか」

この声を聞くたびに、山高武平はゾッとする。

三段式目覚まし時計を用いても、なお彼が起きぬときは、この母親は室内にはいってきて、いきなり掛布団をひんむいたりするからである。

そればかりか、なお彼がモーローとしていると、武平の尻をピシャリとぶったりする。

山高武平は、もはや三十七歳である。しかし、いくら三十七歳となっても、まだ嫁をもてぬ彼のことを、母親は、あくまでも子供あつかいにするのだ。

この六十二歳の母親に、室内に侵入されぬため、彼はついに三つの目覚まし時計を置いた。現在では、一度鳴りやんでまた鳴りだす時計だの、はじめは低く鳴りだして次第に音が大きくなる時計だの、新式の目覚まし時計がいくらもある。

だが、山高武平には、三段式目覚まし時計が一番似つかわしいと思われるのだ。彼自身、自分のことを、さすがにニュー・スタイルの男だとは考えていない。

三十七歳の独身男、いくらなんでも古びてきたようだ。

おまけに、万事につけ古風な六十二歳の母親との二人暮しでは。

その母親が、唐紙越しに、また叫んだ。

「武平、起きたのでしょうね。さっさとお顔を洗いなさい。ちゃんと三遍以上、顔に水をかけるのですよ。それから歯ミガキもちゃんとして。お前は歯が汚ないから、せめて二十回は歯ブラシを動かさなくちゃいけませんよ」

これが毎朝のことなのだ。

母親は息子とは逆に、典型的なヒバリ族であった。六十を過ぎてから、ますます朝が早くなった。

ある医者は、朝型、夜型を、こんなふうに説明したり

する。一晩ねたあとの朝の目覚めの体温を基礎体温という。これは女性の卵巣の機能と関係があり、排卵日を告げる一つの目安ともなるから、若夫婦などにとっては大事なことだ。

一方、その人間の平熱というものがある。朝起きて、基礎体温からほどもなく、その平熱に達してしまうのが朝型。ようやく午後になって平熱に達するのが夜型。

もちろん、これは素人むきのやさしい解説ともいうべきで、生理学的に厳然たる根拠とてないのだが、いとも簡単に、ヒバリ、フクロウと人間を二分してしまうような心理学者よりも、まだしも医学的といえる。

そして、瞬間平熱上昇型のヒバリ族の親玉である武平の母親は、毎朝四時半には目が覚める。それでも、五時までは我慢して床にはいっている。

五時になると、矢も盾もたまらず起きだし、まず庭の掃除をする。掃く落葉などないときでも、目を皿のようにして、雑草の一本くらい引っこぬく。

早朝番組のラジオを聞く。新聞がくると、こまごまと目を通す。広告欄にまで目を通す。

ようやく、この六十二歳の母親は、朝食の支度に取りかかる。本当は、もっと早く取りかかりたくってたまらないのである。しかし、肝心の息子がフクロウ族で、出勤に間にあうギリギリまで起きてこないので、やむを得ない。

おまけに、電気釜なんてものができてきて、万事が簡便になってしまった。本当は彼女は、未だに炭火をおこしたり薪に火をつけたりしたいと思っている。そのほうが、あり余る彼女の朝の時間を、まだしも充実できようというものだ。

御飯は、じきに炊けてしまう。ミソ汁は、あとで作る。香の物を出したり、大根おろしをすったりしながら、彼女は次第にいらいらしてくる。

すっかり準備が整ってしまうと、彼女は、ひっきりなしに、

「またどうして、武平は人並に起きられないんでしょう。それだから、いつまで経っても一人前になれないのだ」

と、口の中で呟く。

やっと、息子の部屋で目覚まし時計が鳴りだす。彼女はため息をつき、
「ひとおつ」
と、口の中で数える。
こうして、三つ目の時計が鳴りだして二分間経つと、彼女は、こらえにこらえていた大声を発するのだ。
「武平、起きましたか」
武平はモーローとして立上がって、一応の姿恰好を整え、洗顔し、歯をみがく。
特にモーローとしている日には、特別に用意してある古い豚毛の歯ブラシを使う。これを使用すると、毛が口の中で何本も抜けてきて、舌やらノドやらを刺激し、ようやっと目が覚めてくるのである。
居間に戻ると、母親がもう御飯を盛り、ミソ汁をよそっている。
季節の香の物、ある朝はアブラアゲ、ある朝はシラス干し入りの大根おろし、ある朝はナットウ、それにツクダニなど。
日本人にとっては懐しい朝の味覚だ。
しかし武平は、できることだったらミルクか果物ジュース、パンにバターという朝食をとりたいと思っている。そのほうが早く片づく。熱い飯に熱いミソ汁では、ふうふういって、さまさなければならない。
だが、この母親と一緒の生活では、それは望むだけ無理というものだ。
以前に武平は、寝坊な自分は朝食をせずに勤めに出、駅で牛乳一本くらいで済まそうとしたことがある。
けれども、古風な母親の反対にあって、この案はつぶれた。
「おまえ、日本人ならお米の御飯とおミソ汁を食べなきゃ力がつきませんよ」
もう武平は、この母親に反対する気力もなくなっている。彼の場合には、前途の希望もあまりない三十代後半の疲れた人生だ。
トイレには行かぬ。それは会社で用を足すことになっている。家でトイレへ行っていたら、彼は毎朝遅刻することになるであろう。
さて、モーローとしながらも手っ取り早く、武平が玄

関を出ようとすると、母親が彼のカバンに弁当箱を入れてくれる。

近ごろのサラリーマンにとっては、この手製の弁当という奴は、けっこう羨ましがられるものだ。

あまり変りばえのしない社員食堂の定食、外からとるカレーライスやラーメンに比べ、弁当には家庭の味がこもっている。

家から持参する弁当は、下手をすると、かえって高くつく。むかしは安っぽい弁当の菜であったタラコでも鮭の切身でも、今ではなかなかの高級品だ。梅干一粒にせよ安くはない。

そんなことより、毎朝、面倒をいとわず弁当を作ってくれるというその心がけが、判を押したような日常のサラリーマンには羨ましい。

「あいつも、いい女房を持ったものだ」

どうしても、そう思われる。

以前、武平が三流出版社に勤めだしたときも、彼の弁当は評判になったくらいだ。

部長が、わざわざ足をとめ、

「おっ、芋の煮ころがし！　なつかしいねえ」

と言ったこともある。

毎日、ラーメンかタヌキソバしか食べぬ同僚が、ある日、いやに真剣に、

「その梅干、ぼくに半分かじらせてくれませんか」

と頼んだこともある。

だが、武平自身にとって、この弁当は、内心いやでいやでたまらぬのだ。

母親は古風な弁当を作る。キンピラゴボウとかツクダニ、ハンペンとか芋の煮ころがし、その間に、暇にまかせて、香の物を二きれ三きれはさんだり、自家製の梅干やラッキョウが入れてある。

いくら母親の心のこもった弁当とはいえ、こういう弁当を、もう十年以上食べてくると、武平の心には、一般サラリーマンと逆の心理が生れてくる。

カレーライスをとってみたい。チャシューメンというものを食べてみたい。いや、ただのラーメンでもよい。

だから、彼は夕食が外食ということになると、このようなものを食べる。

現在、彼が勤めている製薬会社では、社員食堂はあるが、食堂があるだけで、弁当屋から仕出しの弁当をとっている。大食漢は、このほかにウドンかけなどを別に注文して、仕出しの弁当とウドンを交互に食べたりしている。あるいは外へ食べにゆく。

自宅から弁当を持ってくる人は非常に少ない。それも、それこそ愛妻の作った、もっと近代的な、羨望すべき弁当を持ってくる。

その中で、いかにも戦前を思わせる弁当を食べる武平の心理は、複雑なものだ。

このような弁当ばかり食べてきたからこそ、おれはしょっちゅうつまずき、会社がつぶれたり首になったり、出世コースから完全に離れた人間になってしまったのではないかとも考える。

毎朝、母の手作りの弁当は、いかにも重く感じられるのだ。

いよいよ武平は、弁当入りのカバンを持って、玄関から出てゆく。

彼の家は吉祥寺から三鷹寄りの住宅街にあり、戦災にもあわぬ古い家である。

父親は、戦前から長靴工場をやっていた。戦争中、近くにあった中島飛行機の工場を狙ったB29の爆弾を受け、哀れ、長靴は全滅した。戦後、父はまた長靴を作りだし、武平が大学を卒業した年に、ゴム草履に転じようとして、うまくゆかず倒れたが、財産も残さなかった代り、借金も残さず、古めかしい家だけを残してくれた。

武平の一人きりの姉は、関西に嫁に行っていて、この建坪三十余坪もある家に、母と武平だけで住むのは、もったいない。

以前は、間借り人を置いていた。しかし、母親としょっちゅう衝突があったり、いろんな面倒があったりして、二年まえから二人きりで住んでいる。

当然、地価もあがっているこの家を売り、小さなアパートにでも移ったほうが合理的であるが、母親が病的に古い思い出のあるこの家に執着するのである。今は、武平にしても、あえて母親に逆わない。もう、なにもかも面倒になってきた。

狭いアパート暮らしのサラリーマンにとっては、武平のように一軒の家に住み、弁当を持ってくる男は甚だ恵まれた境遇と思えようが、それは、はたから見たことで、武平の内心はくたびれているのである。

人生が、彼が若いころ夢見ていた方向とは、反対にうごいてゆくからだ。

ともあれ武平は、カバンをさげ、玄関の戸を閉める。

朽ちかけてはいるが、一応の門がある。

そこまで歩いてゆく彼の歩行ぶりを描写すると、これがまた妙ちくりんなものであった。

彼は一歩を踏みだそうとして、残った足の爪先でピョコンと、のびあがった。瞬間、彼の全身は硬直し、単に爪先でのびあがっただけではなく、天に向かって、とびあがったかの観があった。

そのまま彼は、すたすたと三歩を歩いた。ところが四歩目に、またもやピョコリと、のびあがった。

そこに門がある。

門を出ても、四歩目ごとに突発するピョコリは依然としてやまぬ。

しかも、そのピョコリが、チャップリンのような名優が全身全霊をこめて演技するかのごとく、なんとも滑稽にして妙なる仕草と映るのだ。

これは武平がわざとやっているのではない。歩きはじめるとき、しばらくはつづく彼の癖、というより立派な病気なのである。緊張しているときほど、このピョコリは甚しくなる。

これがいかなる病気であるかは、追々に説明していこうと思う。

とにかく、およそ十メートルほど歩くうち、このピョコリは段々と低まってきて、ついにはまったく消失してしまった。

武平は、今は普通の人間と変りなく、まだ眠そうな顔こそしているものの、すたすたと歩いてゆく。

といって、門を出てからピョコリが静まるまで、彼の歩行ぶりを目撃した人間は、いずれも、たまげた表情をし、懸命に笑いを噛み殺そうとして顔をそむけた。

それはだれであれ、山高武平のピョコリ式歩行を目撃すれば、笑わないほうが無理というものだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com